

飛行機で12時間かけて異国の地・イングランドに着いたとき、ここから2週間日本に帰れないのだと思うとつらくて、今すぐ最終日がくればいいのになんて願っていた。もともとあまり語学研修に乗り気ではなく、母親に強く勧められて参加した私は、みんながキラキラした目で日本とはあまりに違う街並みを眺めている中で、会ったこともないホストファミリーに受け入れてもらえるか、ただそれだけが心配で、身をぎゅつと小さくして、泣きたい気持ちになっていた。

今思えば、まったく心配いらなかった。イングランドから帰ってきて数日、夜8時。すっかり暗くなった窓の外を見ながら、あつちはまだこの時間は明るいのになあ、なんて思っていたら、一件のメールが届いた。差出人は『ニック&ベリンダ』。数日前までお世話になっていたホストファミリーだ。

彼らのことを思い出して、少し懐かしい気分浸った。少し経った後、私は返信メールを打った。『私のホストファミリーがあなたたちで本当に良かったです』という書き出しで…。

私がお世話になったのは、フットワークが軽いニックと、優しくて気づかいのできるベリンダという初老夫婦だ。二人は小さな庭のある可愛い家に住んでいて、犬のボリスと猫のウイズリーという2匹のペットを飼っていた。

2人と2匹と一緒に過ごした日々は2週間にも満たなかったけれど、私は彼らから様々なことを教えてもらった。

書き出せばきりが無いほどたくさん経験をしたが、そのなかでも2つ、特に印象深かったことを書き出していきたい。

1つ目は、孫であるメイソンが遊びに来た時のことだ。

彼は6歳で、私が行ったときは夏休みだったらしく、4日間だけ一

緒に過ごした。もともと子供が好きなら私はなるべく相手をしようと頑張ったのだが、その時に日本人とイギリス人の言葉の捉え方はそんなに変わらないと言う事だ。なんの話かというところ、彼の話す英語についてである。

彼の英語はとにかく分かりづらかった。彼が来て初日はまったく何を言っているか理解できず、かと言って聞き返して悲しい顔をさせたくなかった。とりあえず私も彼と一緒にハイテンションになって乗り切った。次の日に懐かれ、更に多くの彼の言葉を聞いて分かったのだが、どうやら彼は省略した英語を使っているようだった。

考えてみたら、日本の子供だけでなく大人でさえも省略した日本語を使うことがある、という省略する方が多いように思う。

例をあげて話してみると、「買い物に行ってきたよ」という人に向かって「へえ、どこに？」と言った人がいたとする。その人からすれば「へえ、どこのお店に行ってきたの？」という質問だったとしても、聞かれた方、それが文法通りの日本語を習った外国の人だった場合は「どこに行ってきたの？」、つまり買い物に行ってきたと言ったのに、答えたことを質問されているように感じるかもしれない。

それと同じで、メイソンが「what, s hand?」と私に問いかけてきたことがある。実際は「どちらの手に飴が入っていると思う？」と聞きたかったようなのだが、突然だったので、驚いた私は直訳した。「手とは何か」…。

（私、6歳の子供に何を聞かれています。哲学かな…？）  
難しい顔をしている私を見て、ニックが助け舟をだしてくれなかったら、私はメイソンと会話するのをあきらめていたかもしれない。  
留学するのに、最初から英語なんて話せる必要はない。誰かがそう言っていた理由が分かった気がした。要は本場の英語と私たちが習ってきた英語はまったく違うのだから、本場の英語を話せるようになりたいたなら、最初から何の先入観もなしにひたすら浴びるように聞いた方がいいということだったのだろう…。



して、私の目を見て言った。

「…君がプランナーになってもならなくても、何か君が計画を立てるときに必ず頭においておかなければならないことは何か、わかるかい？」

予想外の質問だった。私が首を振ると、ニックは続ける。

「time、cost、quality、だよ。この三つは常に一緒だ。どれか一つが決まっている場合、君はそれに合わせて他の二つを考えなければならぬ。まさに料理人のようにね」

「料理人：」

私が小さな声でつぶやくと、ニックは優しく微笑んで、けれど真剣な声音で言った。

「経験を積みなさい。いくらでも遅いということはない。たくさんものを吸収して、君のものにするんだ。人生にはたくさん選択肢がある。後悔しない選択肢を未来の君が選べるように、今君は君が必要だと思うことは全てやるべきだよ。」

この言葉に小さくうなずいたとき、私は彼から未来の欠片を分けてもらったのだと感じると同時に、ある当たり前のことに気づかされた。

彼も私と同じ人間なのだ。

心のどこかで、言葉が通じにくいからとか、外見が違うからとか、「自分と違う」という理由で、差別とかではなく、「自分とは違う生き物だ」と漠然と感じていた。それがだいたい耳が慣れて、彼の言葉がまるで日本語のように聞き取れるようになって、彼の言葉が心に刺さってようやく、彼と私は同じ生き物なのだとの底から理解した。心があんなに揺れ動いたのは久しぶりだった。

そのあとも息子さんの話をしたり、次の東京オリンピックのことと議論したりしたが、今までとは全く違う感覚で話していた。そう、まるで一週間前どころか、一年前から知っている人と日本語で話しているような感覚。話し終わってニックがもう寝るように勧めてくれた時には、夜の10時をとうに過ぎていた。

私はこの語学研修で、新しい世界の先端に触れたのだと思う。

では、ここでいう新しい世界とは何なのか。イギリスの環境や文化、他にもあげればきりが無いが、やはり「人」だと私は思う。

「違う」ということを常識として知っていても、いざ「違う」ときに遭遇すると驚くもので、例えば朝起きた時置いてあった朝食が日本では見慣れない形式だったとか、洗濯を毎日しないと、子供を車で送迎するのが当たり前だとか、そういう細かい違いに私はいちいち驚きっぱなしだった。

しかし人の場合、最初はたいして気にならなかった。今まで学校の英語の先生や親せきなど多くの違う国の人と時間を共にしてきたこともあつてか、深く考えていなかった。

けれどニックとのあの会話で、私が本当は「違う」ということを理解していなかったのだと気づいた。根本的に違うと思っていたけど、むしろ根本は同じだった。人間という同じ土台の上に積み重なっていたものが違ったのだ。きっとその違いがすべての「違う」ことを作り上げている。それが、私が語学研修で出した結論である。

今やまた遠い異国となってしまったイングランドに住むホストファミリーにメールを返信し終わり、語学研修のことを考えていたら、ふいに着いたばかりのころの自分の怖がりようを思い出して、一人で笑ってしまう。

漫画とかならここで過去の自分に語りかけるのだろうか。そんなにおびえることはない、素敵な未来が君を待っている！とか言つて。

でも、どうせなら、未来に語りかけた方が素敵だ。きっとまた私は、懐かしく愛しいイングランドに舞い戻るのだろうか。

『素敵なイングランドライフを、あなたが送れていますように』